

合同

No. 491

「招き (altar call)」

—御言葉はわたしのものとなり—

板橋教会牧師

臼田 尚樹



「あなたの御言葉が見いだされたとき わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり わたしの心は喜び躍りました。万軍の神、主よ。わたしはあなたの御名をもって呼ばれている者です」(エレミヤ書15章16節)。

これはエレミヤの苦難の中での告白です。彼は御言葉が見つかったとき「それをむさぼり食べました」と表現しました。「食べる」とは信じて全く受け入れることの比喩的な言い方です。「食べる」というのは、まさに自分の舌で味わったということです。エゼキエルも「わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった」(エゼキエル書3章3節)と言い、使徒ヨハネもパトモス島で同じことを告白しています。そしてエレミヤは「あなたの御言葉は、わたしのものとなり」という体験をしました。それが苦難の中にあるエレミヤを支えます。御言葉が「わたしのもの」となるとき、御言葉の命と力を経験し、心が踊る喜びとなるのです。

わたしは21歳のとき、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」(マタイによる福音書9章2節・口語訳)の御言葉を食べて、それが他の誰かへの御言葉ではなく「わたしのもの」となる経験をしました。そのとき、今まで経験したことがない種類の喜びが心の奥底から湧き起こってきました。献身のときもヨハネの黙示録の御言葉を食べました。そして、ケズイックの聖会での「招き」に応答し「恵みの座」に進み出たとき、御言葉が「わたしのもの」となっていたのです。

ちなみに、「恵みの座」は、契約の箱の上の一對のケルビムの間の「贖いの座」(出エジプト記25章22節)からきています。「恵みの座」は、聖餐

を受けるために前方に進み出て聖餐桌の前にひざまずく聖餐レールのことを指すようになり、さらに「招き」(altar call: altarは祭壇)によって、聖餐にかかわりなく、講壇からの招きに応じて、悔い改めて、神の恵みの座(前方)に進み出ることの意味するようになりました。その場合の「恵みの座」は、前方の説教壇の周辺を指します。それを定着させたのは米国の第二次大覚醒(Great Awakening)を導いた長老派牧師のチャールズ・フィニーです。わたしたちは大胆に恵みの座に近づくとき、「主よ。わたしはあなたの御名をもって呼ばれている者です」という告白へ導かれます。それは「わたしは主のもの」という告白であり、自分が神に捉えられているとの確信です。

2023年2月のケズイックで、カウンセラーの奉仕をしながら、わたしの心は講壇からの「招き」に應えていました。それは、その週の初めの主日に、板橋教会への招聘が正式に決定した週でした。板橋教会へ遣わされるにあたって、主の招きに応答するときに備えられ、コフィ師の「神の召しへの完全な明け渡し」(エレミヤ書1章)からオルフォード師の「霊的成長への招き」(ペトロの手紙一2章)に至るまで、再献身の思いが新たにになりました。

大井満先生がケズイック東京委員会の副委員長(兼事務局長)、わたしが書記ということもありますが、初代日本ケズイック委員長は金井為一郎師、書記が藤田昌直師でした。「この地に教会が与えられた」(板橋教会の半世紀)には、板橋教会の創立前に「教団東京教区長の金井為一郎師は板橋の地に教会が与えられるよう数年間祈り続けていた」(p. 9)とあり、藤田昌直師(小石川福音教会)は板橋教会の秋季特別伝道会(1956年)の講師としてご用されています。(p. 21)ちなみに、今年1月のケズイックニューズレターでは日本ケズイック中央委員長の鎌野善三師が藤田昌直師について詳しく書いています。また、同じ小石川福音教会からメーヤー宣教師とモーク宣教師が板橋教会へ遣わされて創成期の教会を助けたのです(メーヤー宣教師はわたしが受洗した清水ヶ丘教会の教会墓苑に納骨されています)。

板橋教会とケズイックの不思議な繋がりを感じます。人間の思いを高く超え、主の思いを覚えさせます。そして、これからも「あなたの御言葉は、わたしのものとなり」との告白を大切に守っていきたいと改めて思われます。